特集：グローバル化したアジアの看護師と看護教育

周縁に生きる人々と国際移動

―フィリピン先住民族社会における看護師の国際移動とジェンダー―

森　谷　裕美子

近年の国際移動は，人の流れの加速化，多角的な移動パターン，多様な階層の移動，医療従事者の増加，女性化などの特徴をもった，極めて複雑な様相を呈する「グローバルな移民の段階」であるという。フィリピンでも，これまで世界中に多くの国際移民労働者を送出してきたが，近年，こうした現象が顕著にみられるようになり，それが様々な問題を引き起こしている。そこで本稿では，そうした特徴のなかでも特に大きな問題となっているフィリピンの国際移動における医療従事者の増加と女性化に注目し，「グローバルな移民の段階」の一側面を明らかにする。具体的には，フィリピンで最も社会的，文化的，経済的に周縁化される先住民族社会における国際移動，なかでも「女性の仕事」であると人々に認識されてきた看護師の国際移動を取り上げ，そこでの国際移民労働の「女性化」とその社会的背景，およびそれを支える家族や親族，地域社会の状況について明らかにすることで，フィリピンにおける国際移民労働の問題をローカルな視点から相対化し，山積された様々な問題の根本的な解決をめざす，国際移民労働研究におけるフィールド研究の重要性を考える。

キーワード： 国際移民労働者，グローバリゼーション，移民労働の女性化，先住民族，看護師

はじめに

フィリピンで2000年に公開され大ヒットした映画「Anak（邦題：母と娘)」は，香港で家事労働者として働き6年ぶりに帰国した母が，自分たち家族を置き去りにした母に反抗する娘と真正面から向き合いその絆を再生していくというストーリーであるが，その主人公である母は，自分を忌み嫌う娘との葛藤のなかで「父親が海外で稼いで家族に衣食住を与え子供を学校へ行かせると，皆がなんていい父親だと言う。でも，母親はすべてを家族に捧げても，家族と離れて暮らす限り，いい母親とは言われない」と嘆く。実は，最初に海外に出稼ぎに行ったのはその夫であったが，夫は寂しさのあまりすぐにフィリピンへ帰ってきてしまい，それ以来，家族を経済的に支えているのはこの母であり，これまで何回も単身，香港で働いてきた。

フィリピンでは，これまで世界中に多くの国際移民労働者（international migrants）を送出してきたが，20世紀後半にはその数が急増，とりわけ看護師や介護士といった医療従事者の占める割合が増加しており，グローバリゼーションの進展による世界規模での情報や人，物の移動がこうした専門職・技術者の移動にいっそう拍車をかけるようになっていったといわれる。そのいっぽうで，1980年代には「移民労働の女性化（feminization of labor migration」も始まり，2005年には新規海外雇用者に占める女性の割合が約7割を占めるまでになる〔ILO　2004〕。しかしながら，かつてフィリピンでは「夫には妻と家族の扶養の義務があり，妻の役割は家庭の運営者」であるとされ（共和国法第386号），それは現在でも多くの人々の意識のなかに根付いており［小ヶ谷　2001］，その後の1987年憲法や家族法においても，女性は「国家と家族の再生産労働者」と位置付けられてきた。そのことが，それから逸脱する母親を否定的にみる社会規範を形成し，母親が家庭を長期にわたって不在にすることによる悪影響がしばしば社会で議論されるようになり，子供の不良化や家族崩壊の問題がそれと密接に結び付けられ，語られるようになる［Parreñas　2005：36-40］。

小井土は，人の流れの加速化，多角的な移動パターン，多様な階層の移動，そして上述の医療従事者の増加，女性化などの特徴をもつ近年の国際移動を，極めて複雑な様相を呈する新たな「グローバルな移民の段階」ととらえ，このような流れが国民国家の領域管理や経済・社会政策に大きな衝撃を与え，捉えがたい移民政策上の多様な問題を生み出していると指摘する〔小井土　2003：15〕。周知の通りフィリピンは国際移民労働者の最大の送出し国であり，先に述べたとおり，医療従事者や女性の国際移民労働者に占める割合が極めて高く，さらに地方出身者が多いことなどもその特徴としてあげられる〔ADB　2004〕。こうした現

象には，しばしばその背景に厳しい貧困状況があると考えられ，フィリピンでも国際移民労働者の多くが所得水準の低い地域からプッシュされてダイレクトに，あるいはマニラを経由して海外に就労して比較的単純な労働に従事する。しかも，特に経済発展が遅れた所得水準の低い地域からは多くの女性が輩出されているという〔二村　2005〕。もちろん，そのいっぽうで近年増加しつつある専門的な技能をもつ人々は比較的経済的に余裕のある人々であって，小井土のいうように，国際移動の階層は多様化しており，それを支える家族や親族，地域社会の状況も大きく異なっている。しかしながら，国際移民労働へと向かう人々が，いったい「どのような人々であるのか」が全体の統計のなかに現れることは少ない。

そこで本稿では，フィリピンで最も社会的，文化的，経済的に周縁化される先住民族社会における国際移動，とりわけ「女性の仕事」であると人々に認識されてきた看護師の国際移動に注目し，極めて複雑な様相を呈する「グローバルな移民の段階」の一側面を明らかにする。フィリピンは100以上の民族からなる多民族国家であるが，なかでも「辺境に住み伝統的な生活を営む」ことで，しばしば差別や偏見の対象となってきた先住民族の多くが国際移民労働者として世界中で働いているということはあまり知られていない。具体的には，これまで多くの女性国際移民労働者を輩出してきたが，「貧困」という意味では他の先住民族よりも比較的豊かなルソン島北部のボントック族の社会をとりあげるが，それは，フィリピンでしばしばみられる「家計の補助的な役割をする妻，家庭を守る役割としての妻，夫のもとにいる妻，といったジェンダー規範が海外出稼ぎの各局面で重層的に動員される」社会［小ヶ谷　2001］とは異なる社会であり，そこでの国際移民労働の「女性化」とその社会的背景，およびそれを支える家族や親族，地域社会の状況について明らかにすることで，フィリピンにおける国際移民労働の問題をローカルな視点から相対化する。そして，山積された様々な問題の根本的な解決をめざす，国際移民労働研究におけるフィールド研究の重要性を考える[(1)]。

1．フィリピンの国際移民労働

(1)　国際移民労働の現状

海外で就労するフィリピン人をフィリピンでは，一般にOFWs（Overseas Filipino Workers）と呼ぶが，このうち，合法的なOFWsにかかわる問題を管轄するのが海外雇用庁[(2)]（Philippine Overseas Employment Administration：POEA）である。POEAによれば，2007年に国際移動した労働者の数は1,077,623人で，統計上，フィリピンでは国民の約１％を占める人々が何らかの形で毎年，海外へ働きに行っていることになり，そうした人々からの国内送金が現在のフィ

リピン経済や人々の生活を支えているといっても過言ではない(3)。

フィリピンの国際移動労働の歴史は古く，すでに20世紀の初めには農業や漁業に従事する労働者がルソン島北部からハワイや北アメリカへと渡っており，やがて第二次大戦後にはこれら初期入植者の家族や専門職の人々が永住を目的に国際移動するようになっていく。しかし，この時期の移動先は主にアメリカで，しかも永住を目的とするものがほとんどであり，現在のように様々な職種のたくさんの契約労働者が世界中に拡散するようになるのは比較的最近のことである。その大きなきっかけとなったのは1970年代の中東の第一次オイル・ブームによる好景気で，産油国への生産労働に従事する外国人労働者に対する需要が増大し，この機に乗じたフィリピン政府が，失業率の増加や対外債務の膨張といった国内の深刻な問題を解決するため積極的に海外雇用政策を導入したことによる。その後1980年代には中東への契約労働者数は減少するが，今度はNIEs（新興工業経済地域）などが大量の外国人労働者を吸収するようになり，現在では世界中のほとんどの国に何らかの形でPOEAを通じてフィリピン人労働者が送り出されている。こうした国策としての労働力の輸出は，若干の修正を伴いながらも現在も積極的に行われており，年によって多少の増減はあっても依然として全体としての年間の新規雇用者・再雇用者数は増加傾向にある〔Tigno　2000〕。

(2)　国際移民労働の女性化

フィリピン政府自体は，労働政策として国際移民労働の対象を女性に絞りそれを促進しているわけではない。しかし実際には，国内労働市場において良好な労働条件が確保されていないこと，先進国，中東諸国，NIEs諸国で途上国の女性労働力に対する需要があることなどから［石井　2010：206-207]，国際移民労働の女性化が顕著にみられ，POEAの統計によれば1992年の新規雇用者に占める女性の割合はほぼ半分であったのに対し，2005年には約72％へと増加，男女比が逆転している。そうした女性OFWsの特徴としては，女性のほうが男性よりも年齢層が若いという点がまずあげられる。たとえば2005年の統計では女性の半数近くが 15 ～ 29歳のグループに属していたのに対し，男性は年齢にあまり偏りがみられなかった(4)。いっぽう職種別でみると，女性の比率が極めて高いのは家事労働者や介護士であり，2007年の新規雇用者数の上位10職種のうち，1位を占める家事労働者では47,878人（新規雇用数全体の15.6%）のうち女性が94％（47,878人）と圧倒的に多く，3位の介護士についても14,399人（全体の4.7%）のうち女性が92.5％（13,329人），7位の看護師では9,178人（全体の3.0%）のうち女性が87.5％（8,041人），10位の清掃関係が6,300人（全体の2.1%）のうち女性が85.3％（5,373人）となっている。これらの統計から，概して，国

際移動する女性の多くが受入国の人々があまり就きたがらない3D（dirty：汚い，demeaning：屈辱的，dangerous：危険）ないしはSALEP（shunned by all locals except the very poor：送出し国側でも極めて貧しい人しか就かないような）といわれる職種に就労していることがわかる〔Ofreneo　2005：100〕。しかも，これらの職種は不安定で労働実態がよくみえないことから，虐待や不法な扱いを受けやすく，やがて1990年代に海外で就労するフィリピン女性が様々な犯罪に巻き込まれ，それがマスコミに大きく報道されるようになると(5)，国内でも労働者の保護といった問題が大きくクローズアップされ，これを契機にフィリピン政府は1995年法（移民労働者および海外フィリピン人に関する95年法：Migrant Workers and Overseas Filipinos Act of 1995）を制定し，その保護に努めるとともに，女性OFWsの国家への貢献度の高さを認識し，女性が受けやすい就労上の様々な侵害に配慮した政策やプログムの実施の必要性を確認している。

こうしたOFWsのフィリピンにおける最大の貢献の一つはいうまでもなく国内送金による外貨の獲得で，フィリピンの1995～1999年の海外からの送金総額はインドに次いで世界第2位であり，国内総生産（GDP）の約1割を占めている〔ADB　2004〕。しかし，これを国際移民労働の女性化と照らし合わせてみると，相対的にみて女性の数が男性より多いにもかかわらず，送金額は女性のほうが少ない。2005年の海外移民労働者からの送金総額854億ペソのうち，女性労働者からの送金は全体の35.9％（307億ペソ：2010年8月1ペソ＝約2円）(6)を占めるに過ぎず，その主な理由として，女性が家事労働や清掃などの比較的賃金の低い職種に従事する者が多いからであると考えられる(7)。

(3)　OFWsとしての看護師

先にみたように，2007年の新規雇用者数の多い職種のなかで看護師は7位だが，そのうち女性は87.5％（8,041人）で，毎年多くの女性が看護師として海外へ送り出されていることがわかる。OFWsに占める医療従事者の数は1980年後半から徐々に増加，その大部分をしめる看護師は，受入国の状況の変化によって多少の増減がみられるものの，1992年の送出し数が5,742人であったのに対し，そのピークの2001年には13,586人に達している。これは同年の新規雇用のOFWs数全体の4.7％を占め，2003年以降若干の落ち込みがみられはしたものの増加傾向にあり，2006年には2001年とほぼ同じ数（13,525人）にまで持ち直している。今やフィリピンは世界最大の看護師の送出し国となり，現在では約250,000人の看護師がアメリカ合衆国やイギリス，ヨーロッパ，アジア，アフリカ，南米，中東などで就労しているという(8)〔Baldago　2004：1-2〕。

看護師を含む医療従事者の国際移動は1950年代のアメリカ合衆国との人的交流プログラム（Exchange Visitor's Program）にまで遡ることができるが，当時の国際移動は海外でより高度な技術を習得し，本国の医療の質を高めるということが大きな目的の一つであった。さらに1970年代から1980年代にかけて多くの医療従事者が同じ目的で北アメリカや中東へ出かけて行ったが，現実には，その後の中東の就労者が契約終了後，ほとんど帰国したのに対し，カナダや合衆国では多くの人がその永住権を獲得してフィリピンに戻ることはなかった。現在の看護師の国際移動においても永住を目的とするものと，帰国を前提とするものの2つのパターンがあり，前者の渡航先は主としてアメリカ合衆国やカナダ，オーストラリアで，後者は中東やアジアがそれにあたる。特に1990年代になると，世界的な規模で看護師の需要が高まり，少子高齢化が進む先進諸国では肉体的にも精神的にも重労働である看護師という職業に若者が就きたがらないため，不足の看護師を外国人労働者で賄おうと，看護師の不足する先進諸国から極めて魅力的な就労条件が提示されるようになって，ますます彼らを国際移動へと向かわせていった。2007年の看護師の受入先トップ3は1位のサウジアラビアが5,640人と抜きん出ており，アラブ首長国連邦768人，クェート340人と続き，この3国でこの年送り出された看護師数全体の84%を占める。世界でも有数の看護師受入国である中東は，トップのサウジアラビアを始めとして多くの国が大量の外国人看護師を継続的に受入れているが，最近ではヨーロッパや日本もその新たな受入先として注目されている。これを受けフィリピンでは2004～2005年にかけて新たに200もの看護教育を行なう学校（学部・学科等含む）の新設の申請がなされたというが，そのうち認可されたのは24だけであった。看護師を養成する学校は1970年代には80に過ぎなかったが，2004年には329，2006年には460へと急増し，今では毎年約20,000人の卒業生を送出している。しかし，このうち看護師の国家試験に合格できるのは5,000人から10,000人で，正規の看護師の平均年齢は31.8歳，21～25歳の年齢グループが全体の18.4%，女性が全体の95%を占めるという〔Lorenzo et al.　2005：19-20，2007〕。

もちろん看護師は，高等教育を受けることのできる，ある程度経済的に恵まれた者しかなれない専門職であって，経済的な困窮だけが彼らを国際移動へと向かわせる動機ではない。ロレンソによれば，フィリピン人看護師が国際移動する理由は，労働環境の悪さや賃金の低さであるという。2002年の看護師の平均月収は公立で9,939ペソ，私立で9,869ペソであるが，たとえば最も多くの看護師を受入れるサウジアラビアの専門職・技術者の月給は280～1,200ドル（約13,500～57,600ペソ）で，アメリカ合衆国やイギリスと比べると若干低いが，往復の旅費や現地での居住費，食費などがかからないため，その多くを本国へ送金すること

ができるという。さらに，フィリピンでの劣悪な労働環境や福利厚生の未整備，社会的地位の低さなどを考えると〔Lorenzo et al. 2005，勅使川原　2006〕，よりよい賃金と職場環境，すなわち“Greener Pasture”を求めて看護師の国際移動が増加するも当然のように考えられる。看護師を含む医療従事者が最も好む渡航先としてはアメリカ合衆国があるが，そこではより良い労働環境が約束されるとともに，将来的には家族を呼び寄せることも可能であり，イギリスでは資格のハードルが低いだけでなく，手続きも面倒でないため好まれる〔Lorenzo et al. 2005〕。いっぽう，看護師の世界規模での需要の増加に伴い，近年では医者が看護師へと転向し国際移動へと向かう傾向がみられるようになり，優秀な看護師の流出とともに問題となっている。看護師として再教育を受けた医師（Nurse Medicsと呼ばれる）の数は増加傾向にあり，正確な数はわからないが，2004年には2,000人の医師が看護教育を行う学校に入学したといわれ，2005年6月の看護師の国家試験では1,200人の医師が受験したという(9)。

2．先住民族社会での国際移動と看護師

(1) 先住民族社会

今や国際移動労働は，フィリピン国家や国民を支える上でなくてはならないものとなっているが，そうした中央から遠く離れたローカルでは，いったいどのように「グローバルな移民の段階」が展開されているのか。それを明らかにするため，次にフィリピンにおいて最も周縁化される先住民族であるルソン島北部のボントック族と呼ばれる人々の国際移動労働についてみてみたい。ボントック社会は，地勢的にはフィリピンの最も周縁に位置するが，多くの看護師が海外へ働きに出ている点で注目に値する。

①　調査地概況

ボントック族は，ルソン島北部のマウンテン州（Mountain Province）に主として居住する先住民族で，人口は約16万人，人種的には古マレーに分類される。マウンテン州は主都マニラの北東約400kmに位置し，ルソン島北部の中央を縦断する広大なコルディィリェラ山脈が，このマウンテン州と隣接するアパヤオ州，ベンゲット州，イフガオ州，カリンガ州，アブラ州の東部をほぼ包含する。そして，ここにはボントック族と似通った文化を持つ先住民族が多く居住しており，そうした先住民族たちによる行政の単位としての「コルディィリェラ行政地域（Cordillera Administrative Region）が形成されている。マウンテン州はその急峻な地形ゆえに外からのアクセスが極めて困難であったので，歴史的に外来文化

の影響をあまり受けてこなかった。そのため，ボントック族独自の文化が依然として多く残されており，様々な文化変容を経験しながらも，現在もそのほとんどが人口 1,000人程度の地域集団としてのまとまりをもった村落共同体に別れて住んでおり，これが彼らにとって最も基本的な社会生活の単位であって，人々はここに強い帰属意識をもっている。しかし，グローバル化はこのような辺境の地にも浸透しており，彼らの生活空間もまた伝統的な村落から町へ，マニラへ，そして海外へと広がりつつある。

②　貧困と出稼ぎ

先住民族と呼ばれる人々は，少数派であるがゆえに多数派である低地キリスト教民たちから政治的，社会的，文化的に阻害され周縁化されてきた人々であって，現在，彼らが経済的，政治的に直面している大きな問題は，国内・国際社会の経済体制に急速に組み込まれたということと，国内外からの資本の進出と生態系の破壊が人々のアイデンティティーと文化の崩壊を引き起こしていることであるという〔エヴィオータ　2000：277-289〕。それはボントック族の社会も例外ではなく，とりわけマウンテン州における貧困率（貧困ライン以下の人々の割合）は高く，2006年の全国の平均が32.9 ％であるのに対し，マウンテン州では45％となっている[10]。しかも貧困ラインの半分以下の年収40,000ペソ以下で生活する家族が28％もいる。ボントック族の主な生業は棚田による水田稲作農耕であるが，農閑期には女性が畑での作業に従事し，男性が近隣の州の鉱山などに出稼ぎに行くことが多い。また，土地をわずかしかもたない人々は通常，共同労働や小作で生業を立てるか，村落を離れ町や鉱山で働くことになる。公務員など給与所得のある世帯は全体として少なく，またその多くが個人経営の農家であって，ほとんどが主に自給するための米や野菜などを栽培しているため，統計に表れる平均年収はきわめて低い。もちろん，その多くが先に述べたように給与所得者ではないうえ（全体の66％），食料の多くを自給できるマウンテン州では，統計上の貧困率がそのまま実際の貧困状況を反映しているとはいえないが，貨幣経済の浸透やグローバリゼーションの影響が現金収入を求めて国際移動する契機となっているのはいうまでもないだろう。しかしながら，海外からの送金や何らかの形での援助が収入の一部を成す層は年収が40,000ペソ以上の家族であり，その額が最も大きかったのは60,000～79,999ペソの収入がある家族であった[11]。このことは，貧困が必ずしも国際移動の絶対的な要因とはいえないことをも示している。

ボントック族の社会では慣習的に首長をもたず，村落全体の政治や儀礼の運営は長老たちの合議によって決定される。しかし，そのいっぽうで富裕層と貧困層ないしは富裕層と中間層，貧困層の3つの層に社会全体が階層化されており，社

会階層の高いものが様々な場面で強い発言権をもつ。ただし富裕層としての地位につくことができるのは「富裕層の家筋」に生まれた者だけであり，富裕層であるということと経済的な豊かさとは必ずしも一致せず，現実には貧困層のほうが豊かであるという場合も多い。たとえ出稼ぎや商売でたくさんの現金収入を得ることができても，富裕層の出身でない限り人々から羨望と尊敬のまなざしでみられることはなく，彼らは多少の侮蔑の意味を込めた別のカテゴリーの人間として扱われてきた〔森谷　2004：156-178〕。しかし近年のOFWsの増加は，これまでの富裕層としての社会的地位や相互補完的な富裕層と貧困層との関係に変容をもたらしつつあり，また，富裕層からも多くのOFWsを輩出している。ボントック社会では，かつては成人女性が生業活動の主たる担い手であり，男性は村落や家族を守る戦士であったが，現在では男性のそうした役割はほとんど失われ，代わって男性には出稼ぎなどによって「現金収入を得る」という新たな役割が期待されている。また本来，女性の仕事であった稲作にもだんだんと男性が関与するようになってきており，ジェンダー役割の変容がみられる。いっぽう，近年，若者の多くが性別にかかわらず教育を受け町や都市，海外で働くことを好む傾向にあり，農業の担い手としての女性に大きな負担がかかるようになっているという〔前掲書〕。

ボントック族の社会では，村落や家族のもとを離れて働くという行為自体，珍しいことではなく，その移動先が海外である国際移動もかなり以前からみられる。しかし，マウンテン州では2004～2005年にかけて急激にその数が増加しており，男女比では女性が圧倒的に多いなど，全国と同じような傾向がみられる。また，彼らの家族への送金額は2000年に144,659,200ペソであったのが，2006年には232,387,166ペソへと1.6倍に増加しており，海外からの送金がマウンテン州の経済に大きな影響を与えていることがわかるが(12)，とりわけ近年の，州都ボントック・ポブラシオンでみられる家族の送金によって建てられた「出稼ぎ御殿」の急激な増加とそれへの憧れが人々を国際移動へ向かわせる大きな動機の一つともなっている。

(2)　国際移動とジェンダー

先に述べたように，ボントック族の社会では古くから町や近隣の州へ出稼ぎ労働者（そのほとんどは男性ではあったが）が輩出されており，家族のもとを離れて働くことに対する抵抗は比較的少ないように見受けられる。加えてボントック族では，主な生業活動である農耕で中心的な役割を果たすのは女性であり，多くの社会で女性に期待されるジェンダー役割としての家内労働もどちらかといえば女性が主となることが多いが，必ずしも女性の仕事であるとは認識されていな

い。男性も家事や子育てに積極的にかかわるし，人手が足りないときには近隣や親族が助け合う。いっぽう，先祖伝来の財産の相続は父から長男へ，母から長女へと慣習的に男女ともに等しく相続される。こうした経済的側面における女性の地位の高さ，性的分業に対するゆるやかな非対称性，家族や親族，村落が家内労働や子どもの社会化の役割を分担することなどが〔前掲書〕，女性の国際移動を可能にする大きな原動力ともなっている。さらにグローバリゼーションの進展は，これまで中央へのアクセスが困難で，政治的，経済的に周縁化されてきた彼らの社会環境をも大きく変容させ，物理的な距離を越えて情報がやり取りされ，国際移動労働を加速させている。たとえばインターネットや携帯電話の普及により，これまでラジオや半日遅れでやってくる新聞によってもたらされていた様々な情報が簡単に瞬時に得られるようになり，日比経済連携協定（The Japan-Philippines Economic Partnership Agreement：JPEPA）による看護師，介護福祉士候補の日本への送出しのような海外の求人への応募もウエブ登録が可能である。こうして，マウンテン州においても多くのOFWsが毎年送り出されるようになったが，このような国際移民労働によってもたらされる豊かさは，先に述べた，かつての男性を中心とする出稼ぎによる周囲から社会的な尊敬を受けることのなかった「豊かさ」とは異なり，それがボントック族の社会でも大きな力をもち始め，近年，OFWsが帰国後に村落内での様々な問題を解決する際に大きな影響力をもつようになってきているという話を時おり耳にする。

マウンテン州からの国際移動は，先にみたように女性が圧倒的に多いが，職種では家内労働者や看護師，介護士が多くを占める。マウンテン州は比較的就学率や識字率が高いが(13)，それでも子どもを大学へ行かせ看護師にさせることができるのは，比較的裕福な家族に限られており，その多くはマウンテン州でも州庁所在地のボントック・ポブラシオンに集中している。もちろん，ボントック族においても他のOFWsと同様，移動先での人間関係など多くの問題があるが，その押し出し要因の一つとしての経済的困窮という意味では，専門職である看護師は他の職種と比べあまり深刻でない場合が多い。

(3) 医療の現状

次に，マウンテン州では比較的安定して現金収入を得ることのできる看護師がなぜ国際移民労働へと向かうのか，その送出し要因の一つとしてのマウンテン州の医療の現状についてみてみたい。

マウンテン州は現在10 の郡（Municipality）からなり，それぞれの郡には群庁所在地であるポブラシオンといくつかのバランガイ（行政村）がある。2003年現在，マウンテン州全体で公立の病院が6つと私立の病院が1つあり，これ以

外にRural Health Unitがそれぞれの郡に1つずつ計10，行政村単位のBarangay Health Stationが全部で68あり，その他，州都ボントック・ポブラシオンおよび比較的人口の多い郡の1つにクリニックが1ずつ，ボントック・ポブラシオンに歯科医院5，眼科医院2，薬局5がある〔Mountain Province 2004〕。こうしたデータだけみれば，マウンテン州では看護師を始めとする医療従事者の就職先が比較的確保されているように感じる。しかし実際には非常勤での雇用も多く，また，地方では都市部に比べ医療設備が十分に整っていないばかりか，看護師が医療行為を含め様々な役割をもこなさなければならない。賃金においても，地方では州や郡の経済レベルや保健医療に対する予算によって基本給が低くなるため地方ほど賃金が安く（Philippine Nursing Act 2002：RA9173），劣悪な労働環境が人々を地方よりも高い賃金の都市へ，さらに海外へと向かわせ，地方においては都市部より深刻な「頭脳流出」が指摘されている。筆者が聞き取り調査を行なったボントック・ポブラシオンの公立の総合病院（Bontoc General Hospital）では，看護師の多くがOFWsとして海外で就労した経験をもつ。また現在，とても腕がいいと評判の医師の1人がアメリカへ看護師として渡る計画をもっており，すでに資格を取得しているという。これに対して周囲の人たちはマウンテン州から優秀な医者がいなくなってしまうことを心配しているが，本人の意志は固い。

ボントック族の社会ではこの他，病気を霊的存在とのかかわりのなかでとらえ，悪い霊を祓う儀礼とともに薬草の使用などの経験的処置でもって治療する霊的職能者がいる。町では「やぶ医者」などと揶揄されるが，現在でもこうした霊的職能者の役割がまったく失われたわけではなく，とりわけ中央から離れた村落では病因を，自分たちを取りまく霊的存在に求める傾向にある。いっぽう，たとえ近代的な医療による治療を受けたいと願っても貧しい人々にとってはかなりの経済的負担であり，また遠く離れた村落から町の病院まで出かけて行くことは極めて困難であるため，結局はこうした身近な存在としての職能者に頼ることになる。

(4) 看護教育

マウンテン州には比較的最近まで看護教育を行なう大学がなく，看護師を目指す学生は近隣の州やマニラの大学で勉強するしかなかった。しかし，それまであったマウンテン州立大学と専門学校を統合し，新たにいくつかの学部・学科を加えたマウンテン州立ポリテクニック大学（Mountain Province Polytechnic College：MPSPC）が1992年に創設され，その後，2004年に看護学科が人文科学部のなかに設けられたことで，マウンテン州の人々も「地域の発展に資す

る，卓越した能力と世界的な競争力をもつ人材の育成をめざす中心的な教育センター」となることをビジョンとする，このMPSPC で学ぶことができるようになった。2008年8月現在の看護学科のスタッフ24名のうち教員は22名で，うち選任は5名と少ないが，非常勤であっても修士をとれば選任への道が開かれている。学生は全部で614名，うち女性が約6割を占める。ボントック族の間でも，看護師は女性の仕事であるという認識があるが，近年，男性の看護師も増加，男女ともに人気のある職種となっているという。こうしてマウンテン州の人々は，自分たちの州でもって看護師を養成することができるようになり，その多くが海外を目指しここで勉強している。首都マニラから400kmも離れた地方の先住民族の大学で，果たして国際社会で通用するような看護師の養成が可能であるかどうかの懸念もあるかもしれないが，フィリピンの看護教育は，高等教育委員会(14)の方針に基づく看護教育の基準に沿って定められたカリキュラムによって行われなければならず，政府認可の看護教育プログラムによる4年間の教育と国家資格を取得することで初めて看護師になることができると規定されており（Philippine Nursing Act of 2002：RA9173），都市と地方，学校間の若干の格差はあるものの，これによって全体の一定の教育水準が維持されている。さらにMPSPCは，段階制カリキュラム（Ladderized Curriculum）を採用しており，学生がたとえ4年間の課程を終えることができなくても，最初の2年間で就職に必要な技術をある程度身につけることができるように工夫されている(15)。在籍の学生数に対する教室や実習室，スタッフ等が全体として不足しているようにも見受けられるが，教育の質についてはまだ最初の卒業生を出したばかりであってその判断は難しい。そこで，その客観的な指標としての看護師の国家試験の合格率をみてみると，最初の卒業生は42名（入学者数は247名）で，そのうち国家試験を受験する資格があったのが11名，うち6名が2008年6月の試験に合格した。ここ数年の全国の合格率が50%を下まわり，卒業生の多くが試験に合格するためにレビューの学校に通わなければならないといったような状況においては，MPSPCの11名中6名合格の合格率は55%で全国平均を上回り，学校にとって大きな誇りとなっている。ちなみに，この年の全国の合格率は43.07%であった。

この他，マウンテン州では近年，海外への送出しを前提とするマニラの看護学校の分校がオープンした。これは主としてOFWsとしての准看護師を養成するもので，フィリピンでは通常4年間の課程を修了して始めて国家試験を受ける資格が与えられるが，この学校では，最短の1年間でアメリカへ行くための准看護師の試験（NCLEX-PN EXAM）を受けることができるという(16)。いっぽう，正規の看護師の試験（NCLEX-RN EXAM）対策のレビューなども行なっているが，世界的な規模で看護師の需要が高まるにつれ，多くの学生が，時間とお金を

かけずにOFWsとして海外で働くことができるとあって，こうした准看護師をめざして勉強している。いっぽう，介護士送出しのための専門学校の教室もボントック・ポブラシオンにあり，これらの学校の存在が海外での就労を彼らにとってより身近なものにさせている。

3．国際移民労働を生きる

(1) ボントックのOFWsたち

マニラから遠く離れたマウンテン州においても，これまで多くの女性が看護師として国際移動をしてきたが，これらの人々は一体どのような人々であって，人生の困難にどのように対処し，それを切り開いてきたのか。そうしたローカルな国際移動の現状について，ここでは，ボントック族の「生業戦略の一つ」としての国際移民労働を生きる人々を取り上げその実態を明らかにしたい。

ボントック・ポブラシオンの町にはここ20年あまりでインターネット・カフェができ，大きな家やビルが立ち並び，様々な小売店が軒を連ねるようになった。そのいくつかは，OFWsとして働いて得た資金を元手に作られたものであり，ボントック・ポブラシオンで国際移民労働の経験者を尋ねれば，すぐにたくさんの名前が挙がってくる[17]。正確な数は分からないが，それらはMPSPCの講師やBontoc General Hospitalで働く看護師のなかにも多く存在している。そして必ずといっていいほど彼らの家で目にするのが，彼らの送金による家の増改築やたくさんの電化製品であり，そうした経済的な「成功」への憧れが人々をさらに国際移動へと向かわせることはすでに述べた。

マウンテン州から看護師の国際移動が頻繁にみられるようになるのは，1970年代の政府の進める海外雇用政策によって海外雇用者の数が格段に伸びたころで，渡航先は中東が多い。そもそも，この海外雇用政策は1970年代前半に短期の開発政策として導入されたもので，政府は中東の労働力需要に対し，海外雇用における民間セクターの介入をブロックし，これを国策として制度化することを目指した。しかし，その後のOFWsの増加に伴い，多様な業務が政府だけでは手に負えなくなり，結局，リクルート業務を民間に委託せざる得なくなったという〔小ヶ谷　2003：325-326〕。マウンテン州で比較的初期に国際移動している看護師の多くは，政府が積極的に海外雇用に介入していた時期のOFWsであり，フィリピン政府に直接申し込まれた斡旋による雇用が多かったので，嫌な経験も少なく，待遇も比較的よかった。しかし斡旋業者や知人を介した直接雇用の多い家内労働者の場合は，契約違反や虐待など問題も多かったという。近年では看護師も仲介業者を介するものが多く，たとえ仲介業者であってもPOEAが労働者

の権利を守ることになってはいるが，実際には最初に提示された金額と受け取った給与とが大きく異なるといったトラブルもしばしば聞かれた。これらからボントック社会の国際移動は，初期の国際移動をした看護師と近年の看護師とでは前者のほうが就労上の問題も少なく長期間にわたって就労し，後者についてはいろいろと問題がみられ，なかには契約半ばで帰国する者もいた。また，看護師のような専門職と他の職種では就労環境も大きく異なることがみえてくる。

(2) 国際移民労働の問題

OFWsとなる直接の動機は家族の病気，農作物への被害などの困難な状況から抜け出すため，就職がない，より多くの知識と高度な技術を得るためなど様々であるが，フィリピンでの労働環境の悪さもその一つであろう。たとえば，ある移民労働経験者の看護師は「一般的に看護師の役割と考えられていることが，私の経験からするとフィリピンでは異なっている。つまり看護師は時には助産師として，内科医として，外科医として行動する。つまりあらゆることに万能でなければならない」と語っている。しかし，彼女にすれば「最も深刻な問題は給与が安いことであり，それが多くの看護師を海外に向かわせる最も大きな要因である。フィリピンの経済状況は極めて悪く，物価も高いから私たちは海外で働くことを望む」のであるという。すなわち，たとえどのような動機であろうと，彼らを海外へ向かわせる最大の魅力は給料の高さであろう[(18)]。

しかし，せっかくそうしたチャンスを得ることができたのに，契約が終了する前に帰国する者も多くおり，なかには契約終了後，海外に留まる者もいたが，マウンテン州の場合，最終的にはその多くが帰国している。もちろん，就労先は中東がほとんどだったので，アメリカのように契約終了後もそのまま留まることができないといった現実もあるが，彼らのあげる帰国の一番の理由は家族で，契約途中で帰国した理由についても家族に会えない寂しさによるものが多かった。

いっぽう，筆者のインタビューのなかでしばしばあげられた国際移民労働のもう一つの問題は人間関係である。「海外で働くということは決して楽なことではない。たとえ自分が正しくても，仕事でそれが間違っていると相手に言われれば，それに反論することはできない。私たちは外国人であり，単なる看護師にすぎず，しかも看護師であるということは，とりわけ中東では彼らにとってメイドや使用人であるということを意味している」のであり，それは働く仲間どうしであっても同じで，たとえば給与の問題で，フィリピンの看護師のほとんどは4年間の課程を修了し国家試験に合格した者であり，たとえ新米であっても元々専門職としての高いキャリアをもつため，准看護師の資格しかもたない他国の看護師と比べ給与が高くなる。そこで妬みや嫉妬からしばしば意地悪をされたり，足

を引っ張られたりするという。いっぽう，仕事仲間はフィリピン人が多かったが，同じフィリピン人だからといって助け合うとはかぎらず，先住民族であるがゆえの差別，偏見もみられる。さらに，文化的な違いや言語の壁も彼らにとっては大きなストレスとなり，渡航先の中東では英語が使えないばかりか，女性が一人で外出できなかったり，イスラームの戒律が厳しかったりと生活するうえで困難なことが多かったという[19]。しかしながら，彼らに就労する国の選択の余地はない。もちろん，そのいっぽうで，怪我をした父親の治療費を稼ぐために中東にわたったある女性は，中東での生活には多くの戸惑いがあり「ここではフィリピン人として振る舞うことは難しい。たとえ同じフィリピン人であってもお互いの足を引っ張るし，誰も助けてはくれない。“フィリピン人らしくない行動をする”フィリピン人が多くいる」と言いつつも，「海外で自活することや外国の人々とうまくやっていくことを学び，さらに父親の治療費を払うことができた」ことで満足している。

もちろん，前述の彼女のように，そうした困難に耐え契約期間を終えた者もいるが，途中で帰国する者もマウンテン州では多くいる。また，嫌な思いをしたと話した人も「また生きたい」と言い，「いくら給料が安くても日本人のほうがいいから日本で働きたい」などと言う。それは，帰国してもとりあえず食べるのに困ることはなく，非常勤でよければ仕事を見つけることができ，また，契約途中で帰国しても大きなペナルティはなく，チャンスがあったらまた別の仕事先をみつければよいなど，帰国したからといって彼らを窮地に追い込むような要素があまりないことによる。そうした語りから，必ずしも彼らは，コンスタンブルのいうように，しばしばステレオタイプ的に描かれる「家族のために犠牲になって働く無力で受け見の存在」なのではなく，自らの意思で自分たちの人生を切り開く主体であり〔Constable　2007〕，一つの生業戦略として国際移民労働をうまく利用していることがわかる。彼らには帰国後も国際移動労働で得た資金で新たな商売を始めたり，再度，地元の病院で働いたりすることも可能であり，また新しくできた大学で講師をする道も開けているのである。最後に，彼らにたとえ賃金が安くても日本へ行きたいかと聞いてみたが，「もちろんチャンスがあったら行きたい」と答えた。そして「大切なのはお金ではなく，人間関係だ」と皆，同じよう答えたのは注目に値する。

終わりに

フィリピンは，女性の管理職や専門職・技術職の比率が高く，2007年のジェンダー・エンパワーメント指数をみても45位と，アジアにおいて最も女性のエ

ンパワーメントが進んでいる国の一つである。しかし，実際には大学教育を受けた女性でも国内で適切な仕事につけず海外で就労する者が多く，マスコミ報道や友人たちから得られる情報によってその困難を十分に承知しつつも，それでも多くが海外で働くことを熱望する。しかし，たとえそのチャンスを得ることができたとしても，期待した通りにうまくいくとは限らず，失意のどん底で帰国する者も多い。それにもかかわらず，彼らは再び海外を目指す。女性の占める割合が最も高い家事労働者や介護士はしばしば女性の役割と結び付けられるが，フィリピンでも看護師は女性の仕事であると考える傾向が強く，実際にOFWsの看護師に占める割合も女性が圧倒的に多い。しかしながら，近年，看護師として海外で就労するために看護を勉強する男性の数が増えつつあって，「ある職業に就くことで何か有利になるならば，男性はジェンダーに関連する世間体など気にせずにその職業を選ぶ」といった傾向もみられる〔エヴィオータ　2000：279〕。このような意識の変革は別のジェンダー役割においてもみられ，女性が本国への送金を通して家族の維持に中心的な役割を担うことで，男性が主体的に家内労働にかかわることになる[20]。

グローバル化の進展による新しい国際移動の流れは今日，極めて複雑であり，もはやこれまでの「3Dの職種に経済的必要性や家族からのプレッシャー，ジェンダー役割などによって一生懸命耐え忍んで働かなければならない」といったステレオタイプ的な描かれ方では，その労働生活の実態を明確にとらえることができなくなってきている。貧困も確かに国際移動を促す大きな要因ではあるが，ボントック族の場合，国際移動へと向かうのは比較的豊かな層の人々であり，とりわけ看護師については教育にお金をかけることのできる人々であった。また，必ずしも様々な苦難に「耐え忍んで」働かなければならないといったわけではなく，人間関係がうまくいかなければ数ヶ月で帰ってきてしまうような場合もしばしばみられた。帰国後も国際移民労働で稼いだ金を資金に新たな商売を始めたり，再度，地元の病院で働いたりすることも可能であり，また新しくできた大学で講師をする道も開けている。コンスタブルのいうように，彼らは家族のために犠牲になって働く「無力で受け見の存在では決してない」ことがここからみえてくる〔Constable　2007〕。前述のように，ボントック族の社会では，たとえジェンダー役割におけるゆるやかな非対称性が存在しても，家事労働や子育てが女性だけの仕事であると認識されているのではないことや，親族や村落がそうした役割を分担することができること，経済活動における女性の地位の高さなどが「女性が外で働くこと」に対する様々な阻害要因を取り除く結果となり，彼女たちを国際移動へと向かわせる。グローバリゼーションの進展は，これまで中央へのアクセスが困難で，周縁化されてきた彼らの社会的状況を大きく変容させた。それ

がボントック族社会の国際移動を加速させたことは間違いないが，国際移民労働は経済的な豊かさと引き換えに，海外で就労する女性だけでなく，残された家族にも精神的，肉体的に多くの負担を強いてきた。もちろんボントック族においても，移動先での人間関係や家族に会えない寂しさ，なれない生活環境に対する戸惑いなど多くの問題があるし，看護師や医者の「頭脳流出」はマウンテン州だけでなく，フィリピン全体の極めて深刻な問題である。さらに，ここでは扱うことができなかったが，マウンテン州でも海外へ多く送り出す家事労働者についても，また異なる様々な問題があるに違いない。しかし，“Greener Pasture”を求めて国際移動することは，彼らにとって重要な生業戦略の一つであり，それを無理やり止めることができないのも事実である。

そうだとすれば，我々はまず，ギアツのいうように，その「ディテールのなかに降りていくことによって，各々の文化のなかの様々な個人をしっかりと把握することが必要であり，そうすることによって個々人の物の味方から平均的な真実を見出していかなければならない」だろう〔Geertz　1973〕。多様な階層の多様な移動によって引き起こされる国際移動の様々な問題を解決するために，我々は国際移動労働という大きな世界的な動きのなかで「移動する主体」としての実体の研究が，人間中心の文化人類学的な研究において今後ますます必要となってくるに違いない。

（もりや　ゆみこ　九州産業大学）

〔注〕

⑴　本研究は，平成19～20年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「グローバル化のアジアの看護師と看護教育──ジェンダーの視点から」（課題番号19510825）による成果の一部であり，既発表論文である「フィリピン先住民族社会におけるグローバリゼーションと看護師の国際移動」（『九州産業大学国際文化学部紀要』第43号：135-158，2009年）を，議論の中心にジェンダーの視点を据えることで改稿したものである。したがって本論文で用いられる文章の部分は，前述の論文と重複している。

⑵　POEAは労働雇用省（Department of Labor and Employment）の管轄下にあり，1974年の海外雇用政策のもと作られた海外雇用開発局（Overseas Employment Development Board）と国家船員局（National Seamen Board），雇用サービス局の3局が1982年に統合され設立された。OFWsにかかわる政府機関としてはこれ以外に海外労働者福祉庁があり，前者が主として労働者の渡航にかかわる業務を担当するのに対し，後者は労働者やその家族の福祉・厚生関係を担っている。

⑶　ただし，その数は受入国の移民政策の変化によって大きく左右され，たとえば2005年3月に日本政府が入国管理法を改正してフィリピン人エンターティナーの入国資格特別配慮を廃止したため，2006年度の日本への女性の入国が激減，女性の新規OFWsの数も2万人強減少した。しかし，それが国際移民労働の女性化傾向を覆すまでには到らず，2006年には男性の生産現場でのOFWsの数が激増したが，それでも依然として女性の新規OFWs数は男性を

凌いでいる。

(4) http：//www.ncrfw.gov.ph/inside_pages/downloads/factsheets/factsheets_on_filipino_women_03_2008.pdf（2009年3月13日アクセス）。

(5) 1995年にシンガポールで死刑になったコンテンプラシオンや日本の福島県でエンターティナーをしていたシオソン死亡の事件は日本でも大きなニュースになった。これらはフィリピンで映画にもなっており，その関心の高さが窺える。事件の内容と95年法については小ヶ谷（2003）に詳しい。

(6) 本稿では便宜上，2010年8月現在の比率でもってすべてのペソを円に換算しているが，円とペソの交換比率は年によって大きく変動するため，実際のその年の数値とは異なっている。

(7) http：//www.ncrfw.gov.ph/inside_pages/downloads/factsheets/factsheets_on_filipino_women_03_2008.pdf（2009年3月13日アクセス）。

(8) 医療従事者に占める看護師の割合は，1992年から2001年までは看護師がその大部分を占めていたのに対し，2002年に介護士の数が急増，2003年にはその数が逆転している（POEAデータより）。

(9) http：//www.medobserver.com/aug2005/nih.html（2009年3月13日アクセス）。

(10) 貧困ラインは，生きるために必要なカロリーを満たすための食糧と最低限の衣住，医薬品などの必需品にかかる費用から計算されるが，2006年のマウンテン州の貧困ラインは16,785ペソ/1人であった（http：//www.nscb.gov.ph/secstat/d_income.asp，2009年3月23日アクセス）。

(11) フィリピン国際移動と開発統計年鑑2008（Philippine Migration and Development Statistical Almanac）337頁より。

(12) 前掲書，337頁より。

(13) 前掲書，337頁より。

(14) 高等教育委員会は，高等教育機関の質の向上と国際的な競争力をもった人材育成を目的として1994年に設置された。基礎教育（初等教育および中等教育）の管理，監督および規制を行う責任は教育省に，高等教育（大学，大学院）に関する責任はこの高等教育委員会に委ねられている。

(15) このようなカリキュラムは技術教育・技能開発局（Technical Education and Skills Development Authority：TESDA）の技術職業教育・トレーニングプログラム（Technical-Vocation Education and Training Program）によるもので，2004年から始まった。これは，貧しい家庭の子どもが4年間就学を続けることが困難で途中でドロップアウトするようなことがあっても，それが無駄にならないように最初の2年間で就職に有利な技能を身につけさせ，就職した後に再び勉強を続けることができるよう企図して作られている。このTESDAは政府と産業界，地方自治体，労働者が一体となってフィリピンの人的資源の開発と技術の向上を図るべく1994年に設立された（http：//www.tesda.gov.ph，2009年3月23日アクセス）。

(16) 現在のところ法律上，フィリピンでは准看護士を正規の看護師として認めていない。しかし，世界的には准看護士の需要が大きいため，アメリカ合衆国などへ送り出すための准看護師の養成学校が急増しており，高等教育委員会もまた，これまでの4年間の看護教育に段階制カリキュラムを導入することで，こうした状況に対応している。これに対してフィリピン看護師協会は反対の立場を表明，准看護士の養成をただちにストップするよう求めた（http：//pna-ph.org/mainframe.html，2009年3月25日アクセス）。しかし実際には，現在，100近くの准看護士の養成学校がTESDA に登録されており，マウンテン州で准看護師の養成を行っている学校もTESDAによって正式に認可されたものである。

(17) 筆者は2007年8月と2008年8月に国際移民労働経験者およびMPSPC，Bontoc General

Hospitalのスタッフを中心にインタビュー調査を行った。ここで述べられていることは，それを筆者がまとめたものである。

⒅ たとえば，女性看護師のBontoc General Hospitalでの非常勤の給与は1999年からの2年間で平均が約8,500ペソであった。その後，彼女は2002年から2004年までサウジアラビアの病院で働く機会を得たが，このときには2,200サウジアラビア・リヤル（約28,000ペソ）の月収を得ることができた。契約終了後に帰国，その後，2006年に再びサウジアラビアに渡り3ヶ月間の試用期間を経て本契約となったが，そのときの平均月収は 3,400リヤル（約43,600ペソ）であったという。

⒆ 逆にムスリムのフィリピン女性は帰国後，イスラーム世界の中心である中東諸国での見聞から宗教的にもムスリムとしての義務を厳密に履行するようになり，自分たちがより「イスラーム化」したことを象徴的に示すことで尊敬を集めることに成功している。しかし，同じムスリムとしてフィリピン人女性と中東女性の「同胞」としての一体感がここに醸成されるわけではなく，むしろその階層格差を認識することで，改めてフィリピン人としての自覚を強くしているという〔石井　2002：194-197〕。

⒇ たとえばhttp：//www.pcij.org/i-report/2/men-mothers.html，2009年3月26日アクセス。

〔参考文献〕

ADB（Asian Development Bank）2004 *Enhancing the Efficiency of overseas Filipino Workers Remittances.* Technical Assistance Final Report, PHI：4185.

Baldago, Lily Ann R. 2004 *Philippine Nursing Act 2002 Annotated.* Anvil Publishing, Inc., Pasig City, Philippines.

Constable, Nicole 2007 *Maid to Order in Hong Kong：Stories of Migrant Workers.* Second Edition, Cornell University Press.

エヴィオータ，エリザベス・ウイ 2000『ジェンダーの政治経済学』，明石書店

Geertz, Clifford 1973 *The Interpretation of Culture*, Basic Books, New York.

ILO（International Labour Organization）2004 *Towards a Fair Deal for Migrant Workers in the Global Economic*, International Labour Conference, 92nd Session, Report VI.

石井正子　2002 『女性が語るフィリピンのムスリム社会』，明石書店

石井正子　2010 「第5章　フィリピンの開発過程と女性労働政策 ―「移民労働の女性化」が与えた影響」，長津一史，加藤剛編『開発の社会史』，風響社

小井土彰宏編　2003 『移民政策の国際比較』，明石書店

Lorenzo, Fely Maryline E. 2005 *Migration of Health Workers：Country Case Study Philippines.* ILO Working Papers 236, Geneva, ILO.

Lorenzo, Fely Maryline E. 2007 Nurse Migration from a Source Country Perspective：Philippine Country Case Study. *Health Services Research 42-3*（http：//findarticles.com/p/articles/mi_m4149/is_3_42/ai_n27260231/pg_8?tag=content;col1，2009年3月26日アクセス）.

森谷裕美子　2004 『ジェンダーの民族誌』，九州大学出版会

Mountain Province 2004 *Socio Economic Profile of 2004.*

二村泰弘　2005 「第7 章 フィリピンの海外労働 ―「出稼ぎ」と貧困のジレンマ」，二村泰弘編『「貧困概念」基礎研究』，日本貿易振興機構 アジア経済研究所

Ofreneo, Rosalinda P. 2005 Globalization, Gender, Employment, and Social Policy：Comparing the Philippine and Japanese Experiences. *Review of Women's Studies* 15-2：90-112.

小ヶ谷千穂　2001 「『移住労働者の女性』のもう一つの現実――フィリピン農村部送出し世帯の事例から」，伊豫谷登士翁編『経済のグローバリゼーションとジェンダー』，明石書店
小ヶ谷千穂　2003 「フィリピンの海外雇用政策」，小井戸彰宏編『移民政策の国際比較』，明石書店
Parreñas, Rhacel S. 2004 *Children of Global Migration*：*Transnational Families And Gendered Woes*. Stanford Univ. Press.
勅使川原香世子　2006 「フィリピン看護師国際労働移動の国内医療への影響に関する研究――看護師「流出」神話の真実――」，『グローカル』6：35-48（http：//www.kokusai-in-ferris.com/htm/activity/glocal6.htm，2009年3月27日アクセス）
Tigno, Jorge V. 2000 The Philippines Overseas Employment Program：Public Policy Management from Marcos to Ramos. *Public Policy* 4-2：37-86.
United Nations 2002 *International Migration Report 2002*. Department of Economic and Social Affairs, Population Division, New York.

Marginalized Peoples and International Migration of Nurses : A Case Study of the Indigenous Communities of the Philippines

MORIYA Yumiko
(Kyushu Sangyo University)

Recent international migration is a“new complex global migration stage”with features such as acceleration of the flow of migrants, multilateral mobility patterns, migration from various levels of society, increase in the number of healthcare professionals, feminization of labor migration. The migration of the Philippines has same features now, and it causes various social problems.

This paper is intended to discuss about the phenomena of increase in the number of nurses and feminization of labor migration in the Philippines, especially in the communities of indigenous people who are marginalized politically and culturally by Christian Filipinos. And through the analyses of the experiences of nurses went abroad as international migrants from indigenous communities, I prove the importance of field research by local aspect in international migration studies.

Key Wards : international migrants, globalization, feminization of labor migration
indigenous people, nurses